

僕の
六つ星スキルは伝説級？

外れスキルだと
追放されたので、
もふもふ白虎と
辺境スローライフ
目指します

2

Touma Inugami |
いぬがみとうま

ill. 嘴広コウ



アニキ

ルシアを追っている
盗賊団のリーダー。
二人の弟分の面倒を見ている。

タートリア公爵

★★★★★

北方の領地を統治する
タートリア公爵家の当主にして
ルシアの父親。

オーガ・コーエン

★★★★★

王都剣士大会の予選に
タチカワス領の剣士として
出場した傭兵。
やたらとライカに絡んでくる。

クエイク

★★★★★

傭兵団をまとめ上げるリーダー。
四人の曲者を従える。



げん ぶ 玄武

カイリーン王国の北方を
守護するとされる聖獣。
白虎と同様に力を失い、
今はただの詛りの強いしゃべる亀。

びゃっ こ 白虎

カイリーン王国の西方を
守護するとされる聖獣。
かつての力を失ってしまい、
今はただのしゃべる猫。



ニャーメイド

白虎の毛から生み出された眷属。
建築、農業、戦闘は得意だが、
料理については……

ライカ

★★★★★

カイリーン王国の西方を統治する
ホワイトス公爵家の長男。
史上初の六つ星のスキル『ダウジング』を
授かるも、勘当されてしまう。

第一章 攫われたルシア

僕はライカ・ホワイトス。カイリーン王国の西方を治めるホワイトス公爵家の元長男だ。

僕はこの国の慣習に従い、十歳の時に王都の神殿で行われたスキルを授かる儀式、神託の儀を受けて、この国が建国されて以来初めての、六つ星のスキルを授かった。

今までは五つ星までしか確認されていなかったから、それだけで神殿中が大騒ぎだった。しかも、未確認のユニークスキル『ダウジング』というものだったから尚更だ。しかし、このスキルは謎に包まれていて、まったくうまく扱えなかった。

そのせいで僕はハズレスキルの落ちこぼれ扱い。

遂には勘当されて、ホワイトス公爵家を追放されてしまった。

父から唯一の温情で与えられた、領地の外れにあるホワイトス公爵家の別荘（オンボロ）へ行くことになったのだが……道中森の中で出会った小さな猫が、なんと四聖獣の一角である白虎だった。

僕の『ダウジング』はその時偶然に、白虎が求めた「マタタビ石」を探そうとしたことで発動したんだ。

それから、白虎の毛から生まれた眷属のニャーメイドさんが仲間になったり、ホワイトス公爵家を解雇された料理長さんと一緒に暮らすことになったり。更には伝説の鍛冶神かじがみと称されたマウラさんが仲間になったり、北方を治めるタートリア公爵令嬢のルシアと一緒に住むことになったりと、色々あって優しい皆と充実したスローライフを送っていた。

その後、魔獣のスタンピードで壊滅しかけたオーレス領の街を救った僕らは、この領の剣士部隊を率いて、四年に一度開催される、由緒ある王都剣士大会まちけんしたいかいの西方地域の予選へと出場した。

その決勝でホワイトス領に勝利し、予選を突破した僕らは、国王陛下へ謁見し、激励げきれいと称賛の言葉を頂いた。

その際に、オーレス領のスタンピード討伐に対しての虚偽の報告について、国王陛下に激詰めされている父上を見た時は、なんだか複雑な気持ちになったけど。

これで父上を見返すこともできたし、弟のフィンとは和解というか雪解けというか……昔のような仲のいい兄弟に戻るきっかけにもなったんだと思う。

そしてこれから、その祝勝会だ。

「よし！ 皆！ 思いっきり楽しもう！」

「おーーーーー！！」

オーレス子爵や剣士たちが木樽のジョッキを掲げて雄叫びのような歓喜の声を上げる。

オーレス領の剣士たちで溢れる酒場は大いに盛り上がっている。

——バンッ！

しかし、突然、激しくドアが開いた。

いつも冷静なニャーメイドさんが、珍しく焦って酒場へと入ってくる。

「ライカ様……大変デス。ルシアさんの姿が見当たりません！」

「なんだって！ 目を離さないようにお願いしていたじゃないか！」

その報告に、僕はついニャーメイドさんを大きな声で責める。

「すみません。ライカ様たちが王宮に行っている間、ワタシたちは買い物にでかけたのデスガ——」

ニャーメイドさんに経緯を聞いた限り、どうやら犯人は計画的にルシアを攫ったに違いない。

それに、今は責任の所在なんてことより、ルシアを助ける方が先だ。

「よし、ルシアを助けに行こう！」

僕らはオーレス子爵や剣士たちを残して宿屋へと戻ると、急いで準備を済ませ、ルシア奪還のために王都をあとにした。

『『ダウジング』——「ルシア」』

言葉にすると同時に、心の中にルシアの姿を思い浮かべる。

ダウジングロッドが光を帯びて動き出す。

示したのは王都の北の方角。

この方角にはタートリア地方がある。おそらく彼女はタートリア公爵家の手の者に連れ去られたのだろう。

ルシアが作った『奇跡の秘薬』で巨万の富を手に入れたタートリア公爵なら、金に物を言わせてあらゆる組織にルシアを取り戻す依頼を出すことができる。

王都剣士大会の予選で戦った、殺し専門の傭兵団に所属するというオーガ・コーエンも、ルシアを狙うタートリア領以外の者から、ルシア暗殺の依頼を請けていた。凄腕の傭兵を雇ってまで狙うほど、ルシアは多くの者から狙われる存在なんだ。

「ルシアがいなくなった時間からすると、きっとまだ森の中だろうね。よし！ 急いで追いかけてよう」

僕が皆を煽ると、料理長さんが僕の肩に手を置き諭す。

「ライカ坊ちゃん。逸る気持ちはわかりますが、ルシア様は奇跡の秘薬を作るために連れ戻されたはずなので、命が脅かされることは無いでしょう」

たしかに料理長さんの言う通りだ。ルシアの命をどうこうするとは思えられないなら、相手の戦力も何もわからないところに無防備に突っ込んでいくのは愚策だろう。

それに、急いだところでマウラさんの愛ロバ、ロバートの足では、追いつけるとも思えない。

このペースで進むのだとすれば、タートリア領までは五日ほどかかる。

ルシアを攫ったやつらはきつとロバートより早く移動できる。

僕のスキル『ダウジング』さえあれば、ここからでもある程度彼女の居場所はわかるから、じっくりと作戦を考えながら追いかける方が得策だ。

「うん……そうだね。しっかりと作戦を練らないと竈に飛び込む夏の羽虫だね」

「そうじゃ、とりあえず予選大会で折れてしまった刀の代わりに、これを持っておきんさい」

マウラさんが馬車の荷物の中から僕が前に使っていた二本の刀を取り出し、渡してくれる。

「ありがとう、マウラさん助かるよ」

僕は再びルシアを目標に『ダウジング』を行う。どんどん距離が離れていくのを感じると、自然と焦りが大きくなっていくのを実感する。

それでもまずは、落ち着いて策を練ってから進もう。

『『ダウジング』——『魔獣』の範囲半径二百メートル』

僕は今回の剣士大会での経験を通して、『ダウジング』の範囲が調節できるようになった。

「皆、気を付けて。この辺りに一匹、魔獣の反応がある」

馬車から僕とニャーメイドさんが飛び降り、戦闘に備え周囲の気配に注意を配る。

ガサガサと草木の音が鳴った。その藪の中に何かいる。

次の瞬間、藪の中から猛然と飛び出し突進してくる、大きな角を持つ牛のような魔獣。

「ニャー！ アウズンブルが現れたニャー！」

馬車の中から小白虎が叫ぶ。

僕とニャーメイドさんが突進してくる魔獣を避けると、アウズンブルが方向を中途半端に変えて馬車の側面にぶつかった。

ゴンッ！ バキバキ――

「ウニャー！ こいつは、眼の前にあるものの全部に突っ込んでくるのニャー！」

アウズンブルの突進で馬車が浮き上がる。

それを見てニャーメイドさんが攻撃態勢に入る。

彼女は地面を抉るほど強く踏み込み、低い体勢から素早くアウズンブルとの距離を詰めると、伸ばした爪をアウズンブルの心臓に突き刺した。

唸り声と共に巨体は倒れ、アウズンブルは間もなく絶命した。

「あれま、ワシの馬車の車輪と側面が壊れてしまったわい……」

マウラさんは馬車の状態を確認し、頭を抱える。

「大丈夫デス。このくらいであればワタシが直せます」

建築やものづくりが得意なニャーメイドさんからすれば、この程度は朝飯前だろう。

彼女は早速馬車の修理に使う木材を調達するために、森の中へと入っていった。

「馬車が直るまではここで休むしかありませんね。それなら私はこの魔獣を捌いて夕食を作りましょう」

料理長さんがそう言って、ロープでアウズンブルの後ろ足を太い木の枝に括って、吊り上げる。的確に動脈を切断し血抜きをすると、地面が真っ赤に染まる。

こんな状況ではあるが、恋い焦がれた上質な肉と名高いアウズンブルが食べられると思うと、自然とヨダレが出てくる。

僕は、手際よくアウズンブルの皮を剥ぎ肉を捌いていく料理長さんの姿に見入ってしまう。

「料理長さん、その包丁本当によく切れるね。ひょっとして折れてしまった僕の刀より切れるかも」

「そりゃあライカの刀とちがって、刀身全てが白虎様の爪じゃからな。お前の弟の剣と同じ本焼きってやつじゃな」

僕が料理長さんに話しかけると、マウラさんが横から答えてくれた。

「やっぱり僕の刀より切れるのか……」

「次はライカの刀も本焼きで作ってやるでな！ 白虎様が両前足の爪を全部くれたらの話じゃがの。」

ガハハ」

「絶対嫌ニヤ！ 爪を折られるのは痛いんニヤぞ」

話を聞いていた小白虎がすぐに拒絶の意を示した。

「いやいや白虎様。マタタビ酒に酔ってる間にちよちよとへし折りや痛みは無いですけえ」

既にお酒が回っている小白虎とマウラさんはどちらも譲らない。

「そうだ！ マウラさん。僕、今回の予選大会で気付いたんだ。剣より、トンファーの方が自分の戦い方に向いているんじゃないかって」

「そういえばダウジングロッドで戦った時は驚いたぞ。じゃが、ダウジングロッドじゃちい^{ちよつと}と戦いにくかったじゃろ？」

「うん。たしかに。もっと太くて、長い方がいいなって思った」

「ふむ。ちよつと試してみるか。本焼きで刀を作るのと同じ量の素材でできそうじゃしのう」

そう言っていると、マウラさんは小白虎をチラリと見る。

「両前足の爪は嫌ニヤぞ……」

「ライカのためですけえ、我慢してつかあさいよ。ワシも作ってみたいしのう」

「結局自分の創作欲求ニヤアア！」

そんなやり取りをしている間にも、料理長さんは黙々と夕食で食べる肉と、保存用の肉を切り分

けている。

「料理長さん、今日はこのアウズンブルをどう料理をするの？」

以前から美味しいと聞いていた、恋い焦がれていたアウズンブル。妄想の中の料理が期待値をぐんぐんと上げる。

「野宮で凝ったものではありませんし。東方の国の鍋料理『スキヤキ』にしようと思います」

「スキヤキ？ 昔から料理長さんの料理で育ったけど、食べたこと無いなあ」

「ホワイトス公爵は東方の料理がお嫌いでしたので、お出ししなかったのですがございます」

料理長さんが夕食の準備に取り掛かってすぐ、ニャーメイドさんが木材を調達して戻ってきて、馬車の修理を始めた。

小白虎とマウラさんは酒盛りを楽しみ、僕はダウジングロッドを使った戦いを想定して、枝にぶら下げた丸太を相手にして特訓をした。

このダウジングロッドでも戦えないことはないが、もっと太いものの方が、『ダウジング』を使つての戦闘に向いている。

刀と違って、相手を意図せず真つ二つ……なんてことにもならなそうだし。

「皆さん。食事の用意ができましたよ」

料理長さんが呼びに来た。特訓していたのもあって、空腹がピークに達したところだった。

鉄の平たい鍋の中に、濃い色の甘い汁。ネギや葉物の野菜や根菜が並び、薄く切られたアウズンブルの肉が泳いでいる。

なんていい香りなんだろう。食欲をそそり、皆のお腹が一斉に鳴り出す。

「よしければ、鶏卵を溶いたものにつけてお召し上がりください」

「いただきます！」

皆が一斉に卵液に絡めた肉を口に運ぶ。

「美味あああい」

僕らの声は、夜の森に狼の遠吠えのように響き渡った。

「おおおお。この汁がしみたキノコ……火酒が進むわい」

「ウニヤ。わかっているなドワーフ。マタタビ酒にも、ものすごく合うニヤ」

マウラさんと小白虎、酒飲みたちにも大好評だが、もちろん酒を飲まない僕とニャーメイドさんも舌鼓^{したづみ}を打っている。

「甘いものがお米に合うなんて……びっくりだよ。いくらでも食べれちゃうぞ」

「ワタシ、料理長サンの眷属になりたいデス」

無心でスキヤキに食らいつく皆の食べっぷりを見て、料理長さんは嬉しそうに微笑んでいる。

「喜んでいただけて私も嬉しいです。たくさんありますので、どんどんお召し上がりください」
僕らはスキヤキに夢中になり、料理長さんが追加するアウズンブルの肉を次々と食べていった。

「アニキ！ いい匂いはこっちの方からするでがんす」

食事を楽しんでいると、森の中から三人組の男たちが現れた。

「またお前らか！」

アニキと呼ばれた男は、僕らを見て顔をしかめた。

「お前たちは盗賊の……」

僕は彼らを睨みながら双刀に手を掛ける。

「聞いて驚けでやんす。俺たちや泣く子も黙る白虎団^{びやつこだん}でやんす！」

細身の盗賊が名乗った。

白虎……団？

「白虎団？ えっと、もしかしてその名って四聖獣の白虎から？」

僕が聞き返すと、アニキがニヤリと口角を上げながら言う。

「そうだ。白虎団。かつこいいだろう。俺様が付けた崇高^{すうこう}な名前だ」

「ふふい」

「アニキ！ このガキ、今笑ったでやんす」

子供たちが付けそうな名前に思わず笑ってしまった。しかも、白虎とは。盗賊に自分の名前を使われるなんて、小白虎も嫌だろうな。

僕はニヤニヤとしながら小白虎に目を向けると、突然小白虎が叫んだ。

「いい名前ニヤ！」

「いや、喜ぶのかよっ！」

僕は思わずツツコミを入れる。

「猫が喋ったー！」

白虎団の三人組が驚いて腰を抜かす。

「この猫は世にも珍しい喋れる猫なんだ。ところで、何か用？」

小白虎については適当な説明で濁し、それよりも気になる白虎団の目的を探る。

「誘拐されたタートリア公爵令嬢を追っていたら、いい匂いがしてきてな」

「犬並みの嗅覚を持つおでが、匂いを辿ったらここだったでがんす」

「お前ら、その料理をよこすでやんす！」

連携の取れた簡潔でわかりやすい説明だ。見事にセリフを分担している。

「ふざけるな！ 誰が盗賊なんか食べさせるもんか」

ルシアを狙っていたやつらに、食事を分けてやる必要なんて無い。

実力行使に出てきたって、返り討ちにしてやればいいだけだ。

「まあ、いいじゃニヤいかライカ。お前たち、一緒に食っていくニヤ」

「なんでだよ小白虎。コイツらはルシアを追いかけて回してる悪党だよ」

「コイツらはネーミングセンスがいいからニヤ。褒美ニヤ」

小白虎は、自分が崇拜されていることが相当嬉しかったのだろう。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えるでがんす」

そうして一つの大鍋を、僕たち一行とルシアを狙っている三人組の盗賊が囲む。

実にシュールな絵面だ。

「美味いっ！ 美味いぞ！ なんだこの肉は」

アニキが目を輝かせて感激している。

「これはニヤ、アウズンブルっていう魔獣ニヤ」

「猫ちゃん、それって、あの恐ろしい牛みたいな魔獣でがんすか？ 一体どうやって……」

肉を頬張りながら、ガンスという太った盗賊が小白虎に尋ねると、ニャーメイドさんが誇るように応えた。

「ワタシが仕留めまシタ」

「何？　こんな女のメイドごときが仕留めたんでやんすか!？」

瘦せた盗賊、ヤンスがニャーメイドさんをジロジロと舐め回すように見る。

「信じられないなら、その太った男を同じように仕留めてみせまショウカ？」

ニャーメイドさんは殺気を滾らせヤンスを睨む。

「待つて待つて！　ニャーメイドさん、むやみに人を殺しちゃいけないよ」

僕は、必死にニャーメイドさんをなだめ、他の話題を切り出した。

「おじさんたちはなんでルシアを狙っているの？」

「おじ……もちろん、金のためだ」

「あの娘を売り飛ばしや、一生遊んで暮らせるくらいに金が手に入るでやんす」

アニキが答え、ヤンスが補足する。

「お金なんかのために……人の人生をなんだと思ってるんだ」

これだから悪党は嫌いなんだ。自分のためなら人が不幸になろうが関係ないという考えに腹が立つ。

「ふん。お前のような貴族の坊っちゃんにはわからんだろうな。俺様たちがどんなに過酷で貧しい暮らしをしていたかなんて」

アニキは冷たい目を僕に向け、そう言った。

「貧乏だからって悪いことをしていいわけじゃないだろ」

「貴族の金持ちでも悪党はたくさんいるじゃないか。タートリア公爵だって同じだろ」

僕は正論をぶつけられて言葉に詰まる。

「俺様たち三人はな……」

アニキは火酒が入った杯を片手に語り始めた。

第二章 白虎団

カイリーン王国の東方、リユート地方。その東端のスラム街。

孤児だった俺様たち三人はそこで育った。

暗い路地裏に座って、ただ夜になるのを待つ。

グウッと腹の音が鳴るが、それが誰の腹の音かわからないくらい飢えていた。

「アニキ、おで腹が減ったがんす」

「俺もでやんす」

弟分のヤンスとガンスは俺様が面倒を見ている。

「もう少し我慢しろ。あとで俺様が盗んできてやるから」

日が落ちると、薄汚れた俺様たちの服は闇に溶け込み盗みがしやすい。まさに俺様たちの時間だ。もし捕まったら大人には敵いつこない。

なるべく成功率の高い日没後を狙って盗みを働いた。

この日もそうだった。

「お前たち、パンを盗んできてやったぞ」

「アニキ……その顔」

「ああ、ドジ踏んじまってな、店の親父に殴られた」

「ごめん、アニキ。おでたちのために」

「気にするな。このくらい、お前たちの腹がふくれるなら安いもんだ」

「うう……アニキ」

これが俺様たちの日常だった。

「アニキは俺たちより一つ年上だから、今年で十歳でやんすね」

パンを食べ終えると、唐突にヤンスが聞いてきた。

「ああ。それがどうした？」

「町の方の子供たちが言ってたでやんすけど、十歳になって神託の儀ってのに行くとスキルが使えるようになるでやんす」

親がいる子供はいいよな。俺様たちとは違って親の金で王都まで馬車を出してもらえる。

だから俺様たちみたいな孤児は、スキルを持たないまま奴隷のような人生を送る。

まったく世知辛い世の中だ。生まれた時点で負け組が決まったようなものさ。

「ああ。でも王都まで行かなきゃならないんだ。俺様たちに王都に行く手段は無い」

「でも、スキルがあれば、アニキは強盗でも殺しでもやり放題で、金持ちになれるでやんす」
バチン――

俺様はヤンスを思いつき殴りつけた。
「殺したと？ 俺様たちの親は罪も無いのに貴族どもに殺されたんだぞ。やつらの同類になる気か！」

「ふけいざい、ってやつで殺された親の仇を殺してやりたいでやんす……うう」

「だめだ！ 俺様たち三人、殺しはご法度だ！」

ヤンスとガンスが寝静まったあと、俺様は塙の廃屋を出て、雨の降るゴミ捨て場にやってきた。俺様は雨が好きだ。体と心の汚れを洗い流してくれるような、そんな気がするから。

「スキル……か……」

俺様たちのようなゴミの山に囲まれたゴミのような人間でも、いいスキルさえ授かれれば、成り上がるかもしれない。

雨が上がった。日が昇りかけて空が白んでくる頃、決意が固まった。

「おい！ お前たち起きろー！」

「んん。アニキどうしたでやんすか？」

「おで、まだ眠いでがんす」

「旅の準備をしろ。王都に行くぞ」

「王都でやんすか！ アニキ！ まさかスキルを」

「ああ。俺様は、なんとしてもいいスキルを授かってやるぞ」

王都までは、とても子供が歩いて行ける距離ではない。

それに、今から歩いても神託の儀が行われる六月六日には間に合わない。

「でも、あと十日でどうやって王都まで行くでやんすか？」

俺様は、フンと鼻から息を出し笑う。

「いい策があるんだ。お前ら一週間くらい断食する覚悟はあるか？」

この町の平民の子供たちは、貴族の子供とは違い、丈夫な幌の付いた大きな馬車に乗り、皆で一緒に王都へ向かう。

そこで俺様はこの大きな馬車を利用することにした。

「アニキは天才でやんす」

「これなら金払わずに王都まで行けるでがんす」

ヤンスとガンスが初めて乗る馬車に興奮している。
 と言っても、普通の乗り方じゃないのだが――

「大人数が乗る馬車ってのは、荷台の車輪のシャフトが長いんだ」
 俺様の策とは、このシャフトとシャフトに板を渡して空間を作り出し、そこに忍び込むというものだ。

ただ、荷台と違ってサスペンションが効いていない分、乗り心地が最悪なものと、自由に乗り降りできないことが難点だ。

それに、持っていける食料にも限りがあるから、飢えとの戦いも待っている。
 俺様はまだしも、果たしてヤンスとガンスが耐えられるかが心配だ……

「アニキ、おでシヨンベンが漏れそうでがんす」

予想通りの展開。馬車に忍び込んでいる身だから、もちろん「御者さん、用を足したいから止めてください」なんて言えるわけもない。

「我慢するか、その体勢でしろ」

「む、難しいでがんす……」

ガンスは荷台の下で、無理やり用を足そうと奮闘する。

「わっ！ こっちに飛ばすなでやんす」

ガンスから放出される飛沫しぶきにヤンスが騒ぐ。

「(シ―ッ！ お前ら、静かにしろ！)」

一日何度かは、こんな感じだ。

それに、食べ盛りの俺様たちだ。普段から飢えには慣れているとはいえ、それでも限界はある。

「アニキ、おで腹が減ったよ」

「あと四日間だ。我慢しろ」

「ガンス。お前もう食料なくなっただでやんすか？」

「うん。腹の虫が騒いで収まらなかったでがんす」

大食いのガンスは特に辛いだろう。

「しょうがねえな。ほら、俺様の食料を分けてやるから静かにしろよ」

「アニキ、ありがとう。でもアニキのご飯が……」

「大丈夫だ。俺様は腹が減ってないからな」

そんなこんなで今日も日が暮れて、辺りが暗くなってくると馬車が止まる。

きつと今日は、ここで野営をするのだろう。

馬車には二人の護衛が同行していた。もし彼らに見つかってしまえば、最悪殺されることだって

考えられる。

慎重に行動しなければならない。

しかも、この護衛たちは予想以上に有能だった。これまでの四日間、俺様ですら馬車からパンの一つも盗むことができなかった。

グウと俺様の腹が鳴る。

「あはは、アニキの腹の虫が泣いたでがんす」

「おいガンス！ お前がアニキの食料を全部食ったからでやんすよ」

「あ、そうだった。ごめん、アニキ」

「……ああ、大丈夫だ。気にするな」

更に二日経った。

王都まであと二日。水だけで凌ぐのは、俺様はともかくヤンスとガンスは、そろそろ限界だろう。今日こそ食料を調達しなければならぬ。

夜、御者や乗客の子供たちが眠りについた。

交代で睡眠を取る二人の護衛は、一人が馬車の横で焚き火を囲み座っている。

「よし、俺様が盗ってくる。俺様に何かあっても、お前たちはここを動くなよ」

「了解でやんす」

小声で指示を出すとヤンスの返事だけが返ってくる。

どうやらガンスは寝ているようだ。いい気なもんだ。でも、それでいい。

腹が減ったと癪癪かんやぐを起こされても困るしな。

俺様は馬車の陰から這い出し、布団の敷かれた幌の中へと忍び込む。

寝ている子供たちの合間を縫って、食料が入っている箱を目指す。

よし。これだな。そつと木箱を開くと、中にはたくさんの食料がある。

大きなパンを六つ。リンゴとチーズを三つずつ。

よし、これだけあれば王都まで耐えられるだろう。

俺様は両手いっぱい食料を抱えた。

だが、馬車の下へ戻ろうとした瞬間、抱えていたパンが一つこぼれ落ち、それが子供の顔に当たってしまった。

「んん。え、誰？ きゃああー！」

まずい。

叫び声に気付いた護衛が、すぐに荷台の後方を塞ぐ。

「誰だ！ お前は。そこを動くな」

動くなと言われて動かないわけにはいかない。ここで捕まることはできないんだ。

御者台の方から馬車を飛び出した俺様は、盗んだ食料を馬車の下へと投げ込み、森の方に走った。

「おい！ 起きろ！ 泥棒だ」

護衛がもう一人を起こして俺様を追いかけてくる。

必死に逃げる。心臓の鼓動が速い。肺が破裂してしまいそうだ。

全力で走っているからなのか、恐怖からなのか、心臓が太鼓を鳴らしているかのような感覚だ。

護衛たちはそこそこ重厚な鎧を着けていた。箒手やすね当ても着けているところを見ると、少な

くとも全部で二十キログラムはあるだろう。

それならばさすがに俺様でも護衛たちから逃げ切れる。

しばらく走ってから振り返ると、もう護衛は追ってきていなかった。

ヤンスたちは馬車の下に投げ込んだ食料を無事に回収できただろうか。

今更馬車へ戻るなんて危険なことではない。

俺様はともかく、ヤンスとガンスが無事に王都へ着けるよう祈るしかない。

そして、俺様もあと二日で王都へ着かなければならない。

地図は頭に入れてきた。ここからだと王都まで寝ずに歩けば、ちょうど二日で着けるはずだ。

道すがら、食べられるものを探そう。幸い森だから、何かしらはあるはず。

……くそ！ 苛つく。

歩き出したはいいものの、空腹で精神的、体力的に厳しい状態であることを実感する。
なぜ、こんな辛い思いをしているんだ。誰のせいだ？

いや、そんなことを考えるな。無心で歩き続けるんだ。

だめだ、考えようとしなくても頭を過る。相当精神的に弱っているのかもしれない。

あれからどれくらい歩いたのだろうか。朝を迎えて暗くなって明るくなって……

そうか、もうすぐ、丸二日か……

足の裏が、ふくらはぎが、太ももが、尻が痛い。

そして、何より腹が減った。少しでも気を抜けば意識が飛んでしまいそうだ。

辺りを見ると、次第に鬱蒼とした森の木が無くなっていき、空が広くなった。

そして遠くに王都の城壁が見えた。

無限に続くのではないかと思うほどの道のりを歩ききったのだ。

「アニキー！！」

「おーい！ アニキー！」

王都の入口からヤンスとガンスの声が聞こえる。

良かった。あいつらは無事に王都へ着いていたんだ。

「アニキは絶対王都に辿り着くって、俺たち話してたんでやんす」

「おで、アニキが腹減ってると思って、食べ物たくさん盗んだんでがんす」

ガンスが布に巻いて担いでいた、パンとミルク、チーズにソーセージを見せてくる。

「ああ、ありがとう。ありがとう。お前たち」

その後、俺様はスキルを授かり拠点为王都周辺のスラム街へと移した。

そしてその更に一年後、ヤンスとガンスもスキルを授かる。

「ヤンス、ガンス、知ってるか？ ここから西方の地域はな、昔、四聖獣の白虎が守護していたんだ」

「おとぎ話の、あの白虎でやんすか？」

「ああ、四聖獣の中でもな、白虎は民に豊かな暮らしをもたらしたんだとさ」

「豊かな暮らししかあ。おで、豊かになりたいでがんす」

そっだ、ずっとゴミ溜めのようなところで飢えと共に育ってきた。

いつかきつと、豊かな生活を手に入れてやる。

「だから、白虎にあやかつて、俺様たち三人は今日から“白虎団”と名乗るぞ！」

それから数年、白虎団はスラム街を仕切る盗賊三人組として名を馳^はせていった。



「……と、話が長くなってしまったな。だから俺様たちは殺しはやらねえ。盗み専門つてわけだ」
アニキさんの壮絶な過去の話に聞き入っていた。

僕は貴族の家に生まれて何不自由なく生きてきたけど、世の中には、この三人のように恵まれな
い人たちがたくさんいるんだな。

「うう。アニキさん……いい人だったんだね」

「ええ、ライカ様。私めも感動してしまいました。ささ、アニキさんたち、もつと料理を召し上
がつてください」

僕と料理長さんとマウラさんの三人は、アニキさんが話す白虎団の生い立ちに胸を打たれた。
「そうか、やっぱりいいネーミングセンスしてるニヤ！ お前たち」

「白虎様を崇拝するとは感心デス。見直しまシタ」

小白虎とニャーメイドさんは、僕らとは違う部分に感心しているようだ。

「お前らは馬鹿か！ 俺様たちは殺しをしないだけで、盗みは腐るほどしている悪党だぞ……」
アニキさんが僕らの様子に狼狽^{うろた}えながら呟く。

「そうだった！ 一度はルシアを攫った悪党だった。やっぱ肉返して」

「もう腹の中だ。それは無理に決まってるだろ」

僕らは、ひょんなことから白虎団という盗賊と打ち解けてしまった。

「肉、ありがとうな」

「美味かったでやんす」

「飯の恩は忘れないでがんす」

幼少の頃から飢えて育ってきた彼らの感謝の言葉は重く心に響いた。

「アニキさんたちはこれからどうするの？」

「もちろん、今すぐタートリア公爵令嬢を奪還しに行く。俺様たちの戦馬車^{チャリオット}なら二日でタートリア領に行ける」

速いな、ロバートと戦馬車^{チャリオット}ではそんなに速度が違うのか。

「ニャーメイドさん、僕たちの馬車はいつ直りそう？」

「明日の朝には」

うーん。明日の朝からタートリア領へ向かったとしても、ロバートの速度だと四日以上かかってしまう。

少しでも早くルシアを助け出したいのに……

「ねえ、アニキさん。僕一人ならその戦馬車^{チャリオット}に乗れるよね？ 僕も連れてってよ」

「なんだと……？」

僕の突然の申し出に驚くアニキさんたちだが、その後の判断は早かった。

「いや、剣士大会で観たお前の強さは、何かに使えるかもしれないな。お前、名前は……」

「ライカ！」

「よし。ライカ！ 来い」

僕はルシア奪還のため、白虎団と共に行動することに決めた。

他の皆は一度屋敷へ帰り、僕の武器を作ってからタートリアで合流することになった。

「皆と合流する前にルシアを奪還できていれば、手紙で知らせるよ。このさつき引っこ抜いた小白虎の髭^{ひげ}があれば、『ダウジング』で遠い場所に飛ばせるから、手紙を髭に結んで飛ばすよ」

「痛かったけど許してやるニャ。頑張ってニャ」

「ちゃちゃっと白虎様の爪をへし折って作っちゃるけえ待つとれ！」

マウラさんが力強く言ってくれるけど、小白虎には少し申し訳ないな。

「ニヤニヤニヤ……」

「じゃあ、行ってくる！」

僕が言い終えると、戦馬車チャリオットはすぐに動き出す。

僕は初めて二頭の馬が引く戦馬車チャリオットに乗ったのだが、その速さに驚いた。

「振り落とされるなよ」

「うん」

夜通し走り続け、随分距離を稼げただろう。東の空が白んでいる。

森の朝靄あけぞらで視界が少し悪い。

馬を休憩させるために戦馬車チャリオットを停めた場所の先は分かれ道だ。

「さてヤンス。どっちだと思う？」

「うーん。こっちでやんす」

アニキさんの問いにヤンスさんが答える。でも、それよりこっちの方が正確だ。

『ダウジング』——「グルシア」

「何をしてるでやんすか？」

「これが僕のスキル『ダウジング』さ。うん、こっちの道だ」

「へえ、俺が選んだ方向と一緒でやんす」

「へへへ。随分便利なスキルさ。僕を連れてきて良かったでしょ」



タートリア公爵領を進む白い馬車には、外から鍵がかかっていた。

馬車はタートリアの街を進み、幅の広い激流の川の前で停まった。

川の対岸にはタートリア公爵家の大きな要塞のような屋敷が構える。

護衛の剣士が合図を送ると、大きな歯車が回り出し、激流に橋が架かった。

護衛隊長は先行して報告のために、タートリア公爵がいる執務室へ向かった。

「やっと捕らえたか。随分時間がかかったな」

分厚いマントに身を包むタートリア公爵が不機嫌そうに文句を言つと、護衛隊長が申し開きをする。

「申し訳ありません。どうやらホワイトス公爵令息令息が匿かくまっていたらしく」

「なんだと？ あの四つ星のレアスキル持ちか」

「いえ、勘当された長男とのことです」

「六つ星のユニークスキルか……噂ではスキルを使いこなせない無能だと聞いておるが」

「いえ、それが……王都剣士大会の予選を突破するほどの実力でして」

「むむ。そうか……念のため、ルシアの誘拐犯として指名手配書を出しておけ」

「はっ！」

その後すぐにタートリア公爵領のあちこちにライカの人相書きが貼られると、街は大騒ぎになった。

「この少年がルシア様を誘拐したのか！ 許せない」

「またルシア様を狙ってくる可能性があるって話だぞ」

タートリアの街の人々が、貼り出されたライカの人相書きの周りに集まり、ライカがルシアの誘拐犯だというデマは広がっていった。



「もうすぐタートリア領だ。ライカ、『ダウジング』でルシア嬢の位置をもう一度確認しろ」

「うん。わかった」

僕はアニキさんの指示通り『ダウジング』を発動。

ダウジングロッドはタートリアの街の方向を指している。

「うん。間違いない」

「よし。それならまずは屋敷の近くまで行つて、ルシア嬢の詳細な場所の特定だ」

アニキさんがテキパキと指示をくれる。

「いきなり潜入するんじゃないくて、まずは調べるんだね」

「当たり前でやんす！ 俺たちはプロでやんすから」

僕たちはタートリアの街へ入り、旅人用の厩舎に戦馬車チャリオットを預ける。

「お、お客さん。戦馬車チャリオットなんて珍しいな。剣士きんしさんかい？」

「ああ、そんなところだ」

「子連れの剣士さんなん……ん？ まあいいか。たしかにお預かりしますよ」

厩舎の世話係は首を傾げながら馬を木の柵に結ぶ。

「宿屋は偵察のあとに決めるとしよう」

僕はアニキさんを先頭に街中を歩く。

ホワイトスの街より景気が良さそうなのは、ルシアが精製した奇跡の秘薬の恩恵なんだろう。

街の様子をキョロキョロと見回す僕に、ヤンスさんが注意する。

「おい、ライカ。あまりキョロキョロするなつて。田舎者^{いなかもの}みたいでやんす」

「ぐへへ。皆がライカのことを見てるでがんす。田舎者がバレたでがんすよ」

その時、突然アニキさんが小声で僕らに話しかける。

「おい、お前ら……引き返して街を出るぞ」

「なんで？」

「あの貼り紙を見る。ライカ……お前、指名手配されている」

——え、なんで僕が……

街の人々が僕を見ていたのは、あの貼り紙のせいだ。

「まずいな、衛兵たちが向かってくる」

誰かが通報したのだろう。衛兵たちはこちらに向かって走ってくる。

「ヤンス、ガンズ、ライカ！ 走れ！」

僕らはすぐさま踵^{きびす}を返し、街の出口に向かって走る。

しかし、もうすぐで街の出口というところで、衛兵が出口で待ち構えていることに気付く。

「くそ！ 挟まれたか……こっちだ」

アニキさんの指示で路地裏へと入った方がいいが、どうやってこの窮地^{きゆうち}を脱すればよいかわ僕には思

いつかない。

「この路地に入ったぞ！」

衛兵たちの声がどんどん近づいてくる。

「しょうがねえ。お前ら俺様の手を握れ」

「え？」

「いいから早く！」

アニキさんの手に触れると、手が光り出し、僕たちの体を覆い始めた。

『幻^{まほう}影^{かげ}』——『幻^{げん}影^{えい}』“タートリアの衛兵”

僕らの体は光に包まれ、次の瞬間、衛兵へと姿を変えた。

「この路地に指名手配の少年と仲間が入って来ただろう。どこへ行つた？」

衛兵が話しかけてくる。僕が捜し人だと気付いていないようだ。

「なんだと！ 俺たちは逆の方から来たが見ていないぞ」

アニキさんが衛兵のふりをして受け答える。

見事な演技力だ。

「そうか！ よし、他の路地も徹底的に探すぞ」

僕を追ってきた衛兵たちが去っていく。



「アニキさん……これは一体？」

「これがアニキのスキル『幻』でやんす」

ホワイトス家の書庫にある、今までに出現したスキルが載っている『スキル全集』にはこんなスキルは記されてはいなかった……

「ねえ、アニキさん。これってユニークスキルじゃないの？」

「なんだ？ それは。そんなことより、とにかく今はこのまま街の外に脱出するぞ」

出口を固める衛兵のラインは、街の外を搜索するふりをするので、なんとか突破できた。少し離れてから、アニキさんがスキルを解除する。

「だっはああ。疲れた。さすがに四人分の幻影を作るのはキツイな」
アニキさんは木にもたれて座り込んだ。

「それにしても、アニキさんのスキル『幻』だっけ？ すごかったね」

「ああ、俺様たち盗賊としては便利なスキルだな」

「星はいくつなの？」

「それはわからん」

「え？ 神託の儀で司祭様が宣言するでしょ？」

「ああ、俺様たちはちょっと特別でな……夜中、神殿に忍び込んで勝手に神託の儀を行ったから、

よくわからねえんだ」

「俺様たちは戸籍ってやつがねえでやんすから、他のやつらみたいに神託の儀に参加できねえでやんす」

そうか、この国には事情があつてスキルを授けられない子供もいるんだな。

「おではちよつと力持ちになるスキルでがんす。でも、使うと腹が減っちゃうでがんす」
ガンスさんも流れに合わせてスキルを教えてくれる。

「あはは。うん。それはなんか想像できるよ。ヤンスさんは？」

「俺はな……聞いて驚けよ！」

「う、うん」

ヤンスさんも珍しいスキルを持っているのかもしれない。

たつた三人で盗賊団として名を馳せるだけはあるのだから。

「実はな……未だになんのスキルかわからないでやんす！　へっへっへっ」

「えー！ー！」

しばしの休憩。

座り込むアニキさんの周りに集まり、作戦会議が始まった。

まさか僕が指名手配されているなんて思ってもいなかった。アニキさんのスキルが無ければ捕まっていただろう。

「さて、どうしたものか……」

「そうだ！　いいこと思いついたよ！」

アニキさんのつぶやきに、僕はちようど閃いた案を伝えようと口を開いたのだが。

「先に言っておくが、俺様の『幻』は時間制限がある。町の入口から使用したら、公爵家に潜入するまでもたないぞ」

「そう……なのか」

以前、白虎団の皆が潜入した時は、夜会が行われた日だったらしい。

屋敷に続く橋の手前から『幻』で貴族になりましたらしいが、今回はその手は使えない。

各々が頭を悩ませ、アイデアを振り絞る。

「オーレス子爵領の剣士部隊に応援を頼むつてのは……」

僕は思いついたことを口に出してみる。

「ライカ、お前は戦争をしようとしてるのか？　相手は北の地の最大勢力を誇るタートリア公爵領だぞ」

「だ、だよね……参ったな。打つ手なしだよ」

その時、人差し指の先で額をコツコツと叩いていたヤンスさんが、口を開いた。

「何も、街の中の橋を渡って屋敷に入るだけが、潜入する方法ってわけではないでやんすよ」

「どういうこと？」

「公爵の屋敷は激流の川に囲まれているでやんすが、街の外にあたる、裏側から川を渡ることができれば、街の中を通らなくても公爵家の敷地に入れるでやんす」

「それだ！早速見に行ってみようよ」

すぐに僕らはタートリア公爵家の屋敷の西側へと向かった。

第三章 北の四聖獣

——激流の川が轟音と共に眼前を流れている。

「いやいや！絶対無理いいい！」

僕が想像していたよりも激しい川の流れに、これは断念せざるを得ない。

これは筏いかだを作つてとか、そういう次元ではない。

当然、どんなに泳ぎが得意でも対岸に辿り着くことはできないだろうし、橋を架けるにしたって何ヶ月もかかってしまう。

タートリア公爵の屋敷は、難攻不落の要塞と言われるわけだ。

「屋敷を囲う壁にもかなりの人数の見張りが配置されているな……これは完全にお手上げだ」

「そうしたら、次に公爵家へ貴族たちが集まる日程を調べて、綿密に計画を立て直す必要があるでやんすね」

「ああ、これは時間がかかりそうだな」

「ねえ、アニキたち……おで……」

作戦の中断を余儀なくされて皆が俯く中、川を覗いていたガンスさんが振り向き、いつになく真面目な顔で僕らに話しかける。

「どうしたガンス。珍しい案が思いついたのか？」

「いや、おで、川を泳いでる魚の魔獣を見てたら、腹が減ったでがんす」

「かーっ！ お前はやっぱりガンスでやんすね。食うことしか頭に無いでやんす」

川を改めて覗き込むと、この激流に逆らって泳いで登っていく、バーサクソモンという魚の魔獣が見えた。この魔獣はタートリア領の名産品の一つだ。

激流にも負けずに泳ぐその筋肉は、しっかりしてて歯ごたえがあり絶品らしい。

「この激流を泳げるのなんてあの魔獣くらいなものだな」

「あの魚の魔獣の背に乗って向こう岸まで渡ればいいんだけどなあ」

「あんなの手懐けられるわけないでやんす」

アニキさんも僕も現実逃避気味に呟く。川の激しい流れを何度見ても、渡る手段が思い浮かばない。

出直すしかないか。

「おいガンス！ いつまで魚の魔獣を見てる。どうせ捕まえることはできないぞ」

「違うでがんす、アニキ……何かが川を泳いでるでがんす」

「なんだって！」

言われて川を見れば、激流の中を悠々と泳いでこちらの岸に上がる一匹の亀が、のそのそと岩の上に登り日光浴を始めた。

あんなに小さな亀なのに、どうしてこの川を泳げるんだろう。

僕はその姿を啞然としながら見つめる。

「おいどん、なん見よつとか！」

「二亀が喋ったああ！」

こちらを見上げながら、小さな亀が口を開いた。

「おいどん、しゃーしかね。そぎやん喋つとうが珍しかと？」

「訛りすごつ！」

亀が喋ったこともそうだが、その強い訛りにも驚く。

「あ、それより、君はなんであの川を泳げるの？」

「あぎやん緩やかな川ば泳げるの当たり前」

「いや、すごいよそんなに小さい体で」

「そぎやん言いよつとも仕方なかね。わい、この川の名前知つとうと？」

北の地のことはまったくわからない僕の代わりに、ヤンスさんが答えてくれた。

「玄武川でやんす」

「正解ばい！　そして、その玄武ってのはおいのことばい」

「へ？　おとぎ話の玄武様のことやんすか？」

「ほう、おいのことやちゃんと伝説になつとつか。感心感心」

「喋れるだけの小さい亀が玄武様なはずないでやんす。まったく頭のおかしな魔獣でやんすね」

「コラ！　人間風情が聖獣のおいを魔獣扱いするとは、生意氣ばい」

ヤンスさんはそう言うが、僕はこの亀が嘘を言っているとは思わない。白虎だって小型化してしまつたんだ。同じ四聖獣である玄武だつてこの姿になることは十分あり得る。

……もしかして！

「ねえ、僕マタタビ石を持つてるけど……いる？」

僕はダウジングロッドに付いているマタタビ石を指差す。

「あん？　マタタビ石？　そぎゃんもん食らうわけなかうもん。白虎やあるまいし」

「聖獣にはマタタビ石つてわけでもないのか……でも、白虎のことを知ってるんだね！」

「よう知つとうよ。あん化け猫とは古い仲やけんが」

「やっぱり本当に聖獣の玄武なんだね！　マタタビ石じゃなければ何を食べるの？」

玄武は遠い昔を思い出すような目をしながら、静かに言う。

「おいが食べるんは鼈べつしせき甲石やね」



小白虎たちがライカの屋敷の談話室でお茶をしていると、料理長がやってきた。

「皆さん。ライカ坊っちゃんから手紙と地図が届いております」

料理長が白虎のヒゲに巻かれた手紙を広げ、読み上げる。

——皆へ

無事屋敷に着いた？

僕は白虎団とタートリアの街に着いたよ。

だけど聞いてよ、なんと僕はルシアを誘拐した罪でタートリア領で指名手配されてたんだ。

それでも諦めずに、どうにかしてタートリア公爵家の屋敷に潜入しようと考えているんだけど、激流の川を渡れなくて……

そんな時、偶然出会ったんだ。四聖獣の玄武に。

小白虎みたいに小さくなっててさ。

そこで、マウラさんをお願いなんだけど、もしマウラさんが持つてる鉱石の中に『鼈甲石』があれば持ってきてほしいんだ。

僕の方でも探してみるけど、もしあればお願い。

僕たちはタートリア領の南西部。湖の畔^{ほとり}にある白虎団の拠点にて待ちます。

——ライカ

「ニャ……あの化け亀、まだ生きてたのだニャ」

遠い昔を思い出すかのように宙を見つめる小白虎。

「ほう、鼈甲石か。たしか何個かあったような気がするが、どうじゃったかのう……ちようどライカの武器も出来上がったところじゃし、皆で届けに出かけるかのぉ」



「なあ小玄武」

「コラ、ライカ！ 誰が小玄武やと！」

「こちらへんには鼈甲石ってやつ無さそうなんだよ」

「そいぎ川ば渡れんっちゃね」

あれから数日、僕たちはこの拠点である湖畔の小屋に滞在している。

だんだん小玄武の訛りにも慣れてきた。

「あーあ。やることが無いと腹が減るでがんす」

状況の進展は何もなく、僕らは連日、無為な時間を過ごしてしまっている。

「お前はいつでも腹が減ってるだろ」

「それならアニキ、食料を盗みに行こうでがんす」

「ここをどこだと思ってる。こんな森の中で誰から盗むんだ」

「人間は飯ば食わんといかんけん大変やろうばってん。それが人間に生まれた性^{さが}ばい」
そんな話をしていると、小屋の外から声が聞こえてきた。

「シッ！ 小屋の外に誰かいるぞ、お前ら声を出すな」

すぐに僕は息を潜め、耳をすます。

「おお。ここじゃここじゃ。多分この小屋のことじゃろ」

「あ、この声はマウラさんだ！」

ドアを開け、僕は飛び出した。

たった数日ぶりに、皆の顔が随分と懐かしく感じる。